



第 60 回 岡山県の歴史上の偉人の言葉

5 月下旬に 5 日をかけて岡山県内の数か所を巡ってきました。その目的の一つは由緒ある建物を見ることでした。もちろん多くの魅力的な建物に出会うことができましたが、さらにそれを作った人にまつわる話を味わえたことが大きな収穫でした。岡山県に限らず日本のどの地方にも優れた文化遺産とそれにかかわる歴史上の偉人がいるのは素晴らしいことです。当時の教育文化の賜物ですね。これらの偉人に共通するのは、彼らは利他の考え方を貫いて独創的な事業を提案し、前例がないことに起因する困難を克服してスケールの大きな事業を完成させたことです。このストーリーは理系の研究の提案、推進、完成にも共通することに気づき、感動しました。以下では今回訪れた場所と、それにまつわる偉人を紹介しましょう。末尾には関連する写真も掲載します。

なお、この機会に鷲羽山の山頂にも登ってきました。澄み切った青空の下、美しい瀬戸大橋を望むことができました。本州と四国とを結ぶこのように立派な橋がかけられ、これを使って現代人が日々快適に暮らすことができるのも歴史上の偉人の貢献に起因することが少なくないと思います。

【1】 閑谷学校と津田永忠

岡山藩主池田光政公は儒学に基づき人を思いやる「仁政」の実現を目指し、閑谷学校（所在地は現在の備前市）を創建しました（寛文 10 年(1670)）。これは庶民のための世界最古の公立学校で、日本遺産の第一号となっています。ここで注目すべきは光政公の家臣の津田永忠（1640～1707）です。永忠は建設の実務を担い、約 30 年かけて元禄 14 年（1701）に現在とほぼ同様の外観を持つ、堅固で壮麗な閑谷学校を完成させたのです。永忠は建築・土木事業の天才技術者で、今では「岡山のレオナルド・ダ・ビンチ」とも讃えられています。閑谷学校はその外観こそ地味であるものの、きらびやかな東の日光東照宮に対し、西の閑谷学校といわれるほど優れた建物です。永忠は「仁政」を実現すべく、「知行合一」（学んだ知識をそのままにせず、良いと思うことは必ず実行する）の考えで建設の実務をまっとうし、建物の完成後もその維持管理に努めました。彼の精神は現代にも受け継がれ、近隣の学校の生徒たちが多く見学に来ています。彼らはまず建物中央部にある講堂で孔子の教えを学び、その後には皆で講堂の床の雑巾がけをして建物の保全体験をします。

【2】 大原美術館と大原孫三郎

著名な大原美術館については今さら詳しく説明する必要がないでしょう。これは倉敷紡織などの経営者である大原孫三郎(1880-1943)により昭和 5 年（1930）に創設されました。洋画家の児島虎次郎とともに西洋の優れた美術作品を収集し、それを公開して洋画を日本に普及するためです。昭和 7 年(1932)に国際連盟のロットン調査団の団員が倉敷を視察した際、これらの絵画のコレクションに感動して文化の街と認識したことから、倉敷は太平洋戦争中の爆撃目標から外されました。また、それに先立ち明治 40 年(1907)には倉敷に

日本軍の連隊が置かれることになったのですが、孫三郎は風紀の乱れを心配して反対。その結果倉敷は軍部をまぬがれ、これが爆撃目標から外れたもう一つの要因となりました⁽¹⁾。そのおかげで倉敷の中心部には今でも戦前から続く立派な建物が多く残り美観地区を形成しています。いわば孫三郎は文化事業を通じて戦災から倉敷を守ったともいえましょう。

孫三郎はこれ以外にも公益性の高い諸事業を多く推進しました。なお、孫三郎もまた短期間ながら【1】の閑谷学校で学びました。

(1) 城山三郎、「わしの眼は十年先が見える」(新潮文庫、平成9年)。

【3】岡山後楽園と津田永忠

特別名勝の岡山後楽園は日本三名園の一つとして広く知られていますので、これも今さら詳しく説明するまでもないでしょう。この庭園は岡山藩主池田綱政公が家臣の津田永忠(上記【1】)に命じ、貞享4年(1687)に着工し、元禄13年(1700)に一応の完成をみたものです。その後も手が加えられました。【2】の倉敷とは異なり、岡山は昭和20年の戦災で大きな損害をうけました。岡山城は焼失し、後楽園も大きく損傷しました。しかし戦後になって江戸時代に作成された後楽園の絵図が発見され、それに基づいて復興されたのです。江戸時代にこのような正確な絵図が作成された事、これが大切に保管され戦禍を免れた事に深い感銘を受けました。

永忠は閑谷学校建設、後楽園作庭を指揮したのみでなく、干拓事業などの多数の公共事業を手がけました。岡山藩の、そして現在の岡山県の基礎を作り上げた偉人です。後楽園内に明治29年(1896)に「津田永忠遺績碑」が建てられました。

【4】備中高梁と山田方谷

高梁市は岡山県西部に位置し、昔は備中松山と呼ばれました。JR線備中高梁駅周辺は「小京都の町並み」になっています。そこから少し離れた小松山の山頂(標高430m)には国指定重要文化財の「備中松山城」がそびえ立っています。これは天守の現存する山城としては唯一の存在で、鎌倉時代を起源とし、天和3年(1683)に水谷勝宗によって修築されました。「難攻不落の名城」の面影があります。小松山のふもとの城下には武家屋敷、頼久寺庭園、紺屋川筋美観地区などが保存されています。武家屋敷の近隣の岡村邸の門は松竹映画「男はつらいよ」第8作--寅次郎恋歌--(マドンナ役は池内淳子)のロケ地として使用されました。

私がこの地区を訪れ、感銘を受けた偉人は山田方谷(1805-1877)です。方谷は農商家に生まれたものの、勉学に励み儒学者の道を歩みました。そして遂に32歳で藩校「有終館」の学頭に就任しました。その後、板倉勝静公(幕末には老中)により藩の財政責任者に抜擢されました。当時の藩の財政は慢性的な赤字、借財に苦しむ危機的状態でしたので、方谷は大胆な改革案を提示しました。藩の関係者からは「学者には何もできないだろう」などと激しく足を引っ張られましたが、信念をもって着実に遂行しました。本稿冒頭に記したように方谷もまた利他の考え方を貫き、独創的な案を提示し、困難を克服したのです。その結果短期間で財政を黒字に転換するという改革を見事に成し遂げました。さらに、農兵隊を編成して西洋式の徹底した軍事訓練をし、長州の久坂玄瑞をも驚かせたそうです。全国諸藩から方谷に教えを請う人が多数訪れました

が、河合継之助もその一人。継之助は越後長岡藩の藩政改革を行ったことで広く知られていますが、方谷の教えを受け帰途につく際、見送る方谷に土下座をして拝したそうです⁽²⁾。

幕末から明治初期に至る激動の時代を駆け抜けた方谷は、「姿勢惻怛」（誠意を尽くし人を思いやる心）と「市民撫育」（すべては藩士と領民のために）の精神を貫き、教育への情熱を燃やし、社会に尽くしたのです。

(2) 司馬遼太郎、「峠」(上) (新潮文庫、平成 15 年)

今回は素晴らしい建物に出会うための旅でしたが、それにかかわった歴史上の偉人の人生に触れ、冒頭にも記したように奇しくも理系の研究の進め方との共通点について再考することができました。

===== 関連写真集 =====

【1】 閑谷学校と津田永忠



閑谷学校講堂



中学生たちが講堂の床を雑巾がけ

【2】 大原美術館と大原孫三郎



大原美術館 正面

【3】岡山後楽園と津田永忠

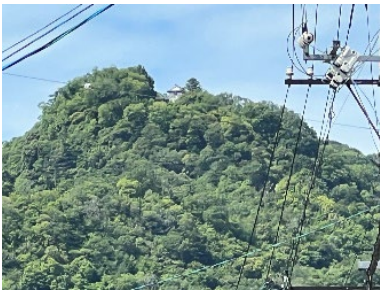


岡山後楽園 庭園



津田永忠遺績碑

【4】備中高梁と山田方谷



小松山頂の備中松山城



備中松山城の天守閣



武家屋敷のシャクヤク



頼久寺庭園



岡村邸の門（松竹映画「男はつらいよ」第8作のロケ地）



【付録】鷺羽山山頂



山頂からの瀬戸大橋の眺め